裸の付き合い

諏訪　彰

最近，全国各地の方々に御協力いただき，<写真集>「日本の火山活動—戦後36年の記録」（共立出版）を刊行した．それを編著していると，過ぎし日のさまざまなことが，走馬燈のようにまぶたに浮かんできた．そして，もう27年半も書斎に掲げてある，噴煙中の火山島の油絵に，今更のように見入りながら，今は亡き和田香苗画伯（光風会）との出合いを思い出し，懐しさを禁じ得なかった．

「火山観測」という名の予算を政府が気象庁に与え始めたり，停会していた日本火山学会が再興されたりしたのは昭和31年である．それで，昭和29年頃には，この分野の観測，研究を，やがて，全国諸火山で本格的に発展させよう，との意欲に燃えながらも，東京に比較的近い浅間山と伊豆大島を試験台にして，細々と勉強を続けていた．

その年，7月18～27日にも，浅間山ろくの星野温泉（軽井沢）に滞在していた．浅間山は，前年12月末に噴火を始め，この年は全年にわたって，しきりに爆発を繰り返し，軽井沢にもしばしば降灰した．私は，昼間は野外観測などを行ない，夕暮れ時に入浴するのを日課にしていた．当時は，軽井沢も，近年のような観光ブームではなく，盛夏の夕刻の浴場でも，2，3人の客と一緒になる程度であった．それで，全く見ず知らずの間柄でも，浴室への出入りには挨拶しあい，時には，ふと，その日の天候や噴煙のようすなどについて軽い会話をかわすといった，おおらかな雰囲気であった．

私はかなり強い近眼である上に，湯気のためもあって，会話の相手の顔つきなどはわからず，また，それをお互いに確かめあう必要もない，文字通りの裸の付き合いであった．数日するうちに，音声から同じ相手であることがお互いにわかり，しかも，噴煙—降灰に特に関心をもっている点は共通しているが，私はそれがあると張り切る火山学者で，相手は，降灰による絵の具の物理・化学的な汚濁や変色を極度にいみきらう画家であることがわかった．とはいえ，氏名や職業などをまともに紹介しあったわけではない．

ある夜，その相手が，先に体をふき，明朝，帰京するという挨拶をして，脱衣室へ戻って行った．しかし，身ごしらえをすますと，再び浴室への戸を開け，突然，「このままお別れしようかとも思いましたが，貴方なら，きっと，あの絵を末長く大切にして下さると思いますので，是非，差し上げたい．僕の氏名，住所などは，帳場で聞かれれば，わかるので，帰京されたら，とりに来ていただきたい．」と申し出られた．もちろん，私も喜んでお受けし，それは8月8日に実現した．

この絵は，同画伯が昭和10年に船上から描かれたもので，陽光に輝く南海上にそびえたつ活火山，ウラカス島（マリアナ諸島北端）の勇壮な風景なのである．なお，同画伯は，東京高等工芸，千葉大学，工学院大学の教授を歴任され，私より12歳も年長であった．

（元気象庁）